

優秀賞（南海放送賞）

「『当たり前』がうれしい」

東温市立重信中学校 3年 渡部友萌香

みなさんにとって「当たり前」とは何ですか？私は生まれつき他の人より耳の聞こえが悪く、生活に不便ことがあります。このような私の生活の中で経験したことや考えたことを書いてみようと思います。

私のことを知らない人が多い場所では、困ることが多少あります。例えば買い物に行ったときに、レジで店員さんの声が聞こえるかどうかということにドキドキします。聞こえなかったときには、一度は聞き直すのですが、それでも分からないときには、何度も聞き返すのも悪いと気を遣ってしまい、分かったふりをしてしまいます。自分が何か返事をしなければならなかった場合は、自分の返事が間違っていないかどうか、その後も心配になります。そんな気持ちになるのなら、聞こえるまで聞き返せばよいのかもしれませんが、どうしても気を遣ってしまいます。

初対面の人が相手の場合は、このようなことがあるのですが、学

校生活でも、大勢が集まる集会で話が聞こえないことがあります。しかし、そんなときには席を前にしてくれたり、話す人が口元の動きをはっきりとしたりして、内容が分かるようにしてくれています。また、どうしても補聴器を外さなければならない場面もあります。この時には本当に不安になります。小学生の時、補聴器を外して水泳の授業をしていました。先生の指示を理解していなくて何かあってはいけないと、私は不安な気持ちになっていました。でも、私には心強い味方がいました。それは、小さな頃から一緒に過ごしている友達です。彼女たちは、何も言わなくても、ジェスチャーを使って先生の指示を私に伝えてくれました。そのおかげで安心して授業を受けることができ、とてもうれしい気持ちになりました。

こんなとき、私のことを特別扱いして「助けてあげなければならぬ」という義務感でサポートされると、私も気を遣ってしまいます。しかし、周囲の友人は私のことをありのままに受け止めてくれ、自然な感じで私が困らないようにしてくれています。私が分からないことが分かるようになるのもうれしいのですが、耳のことは関係なしに一人の友人として当たり前に関わってくれているのがとてもうれしいのです。仲の良い友人や何でも言える友人を「信頼できる人」と

考える人が多いかもしれませんが、私にとっては、それらに加えて進んで声を掛けてくれたり、助けてくれたりする人の信頼度はさらに高まります。

このように助けてもらう経験から、私も何かできることはないかと考えるようになりました。そこで学校で友人がしている役割を手伝うようになりました。プリントやノートなどを配るという簡単なものですが、いつも当たり前にしてもらっていることを、私も自分にできる当たり前のこととして、進んで声を掛けたり、手伝ったりしようという気持ちでしています。

また私は、学校内のボランティア団体に所属しています。きっかけは、小学生の頃に J R C 委員会に所属していたことです。初め委員になったときには、特に興味があったわけではありませんでした。しかし、アルミ缶回収や清掃活動をしていく中で、楽しいと思うようになりました。中学校には何年も前から T ボランというボランティア団体があり、小学校でしていた J R C と同じような活動だったことと、友達に誘われたことから、活動を始めました。T ボランで行うボランティア活動の中には、助ける相手が近くにいないものもあります。例えば募金がその一つです。私が所属しているときにもいくつか

の募金活動を行いました。一人一人が出すわずかなお金で、これまで関わることのなかった人とのつながりができます。

最近、「共生社会」という言葉をよく聞きます。私のことをよく理解して、私に気を遣わせることのないようにサポートしてくれるのも、目の前にいない人のために何かすること、自然と湧いてきた気持ちで行っている当たり前のことです。耳が聞こえにくい私でなくても、人にはそれぞれ困ることや苦手なことはあります。それを自然とできる人や得意な人が、ちょっとだけ手助けすることで、困っている人の気持ちは楽になるものだと思います。年齢や性別、国籍などに関係なく、困っている人がいたら声を掛けたり、相手の意見を尊重し思いやりの気持ちを持ったりして、自分にできることを積極的に「当たり前」に行動することで、誰かの支えとなります。そんな小さな行動がいろいろな場面で広がり、たくさんの人の支えになっていくことで、共に支え合いながら生きていく「共生社会」をつくることのできるのではないかと考えます。